源氏物語「月立つ」考

――古代人の時間意識に関連して――

竹村義一

暦の上で、月の最初の日である、朔日が〝月立〟の音便であることは、晦日が〝月隠〟の約であることとともに、古代人の時間意識の構造を、きわめて特徴的に示しているものと考えられる。

〝月立〟が名詞化する前の、もとの形の〝月立つ〟という表現は、上代では万葉集、中古では源氏物語その他の物語・日記にその用例をいくつか見ることができる。〝月立つ〟がいかなる場合に用いられているか、その用例について見て行きたい。

源氏物語の用例を巻の順に列挙する。テキストは日本古典全書、数字は巻数とページ数を示す。

(1) 十月に朱雀院の行幸あるべし。……「立ちぬる月（今ヲ十月ト考エ九月トトル）の廿日の程になむ、つひに空しく見給へなして……」（紫ノ上ノ祖母尼君ノ死去ノコトヲ述ベル条）　若紫　一―三一九

(2) この御事（藤壷ノ御産ノ事）の十二月も過ぎにしが、心もとなきに、この月（正月）はさりとも、と宮人も待ち聞え、内裏にもさる御心設けどもあるに、つれなくて（何事モナクテ）立ちぬ。　紅葉賀　一―三七八

(3) ……七月廿日よ日のほどに、また重ねて（源氏ノ）京へ帰り給ふべき宣旨下る。……六月ばかりより心苦しき気

色ありてなやみけり（明石ノ御方懐妊）……京よりも御迎へに人々参り、心地よげなるを、あるじの入道涙にくれて、月も立ちぬ。　明石　二―一九四

(4) かくて（玉鬘ハ）御服（祖母大宮ノ死ニヨル喪服）など脱ぎ給ひて、月立たばなほ参り給り給はむこと忌あるべし。十月ばかりに、と（源氏ガ）思し宣ふを……　藤袴　三―二七一

(5) 九月にもなりぬ。……大将殿（髭黒）には、「なほ（九月ハ忌月故玉鬘ノ出仕ハアルマイト）たのみこしも過ぎゆく空の気色こそ、心づくしに、

かずならばいとひもせまし九月に命をかくるほどぞはかなき

月たたばとある定めを、いとよく聞き給ふなめり。　藤袴　三―二七六

(6) 正月廿日ばかりになれば、空もをかしき程に、……霞みわたりけり。（源氏）「月たたば、御いそぎ（朱雀院五十ノ御賀ノ準備）近く……　若菜下　四―一四四

(7) 姫宮（女三ノ宮）はあやしかりし事（柏木トノ密事―四月）を、おぼし嘆きしより、やがて例のさまにもおはせず、なやましくし給へど、おどろおどろしくはあらず、立ちぬる月（今ハ六月デ五月トトルー吉沢）物きこしめさで、いたくそこなはれ給ふ。　若菜下　四―一八九

(8) 「例のたたむ月の法事の料に……」（女三宮ヨリ薫ヘノ詞）　宿木　五―一八五

(9) 月も立ちぬ（匂宮ハ）かう思し焦らるれど（宇治ヘ）おはしますことはいとわりなし　浮舟　七―一五

(10) 月たちて、今日ぞ（宇治ヘ）わたらまし、と、思ひ出で給ふ日のゆふぐれ、いとものあはれなり。　蜻蛉　七―一〇八

(11) （横川ノ僧都ヨリ薫ヘノ詞）「まかり下りむこと、今日明日は障り侍る。月たちての程に、御消息を申させ侍らむ」　夢浮橋　七―二二八

右の例文の中で、解釈について諸註釈書の間に意見の違いのないものは、

(一) (4)(5)(6)の月〝たたば〟は、〝月がかわったら〟〝新しい月になったら〟の意で、〝来月〟の意としている。

(二) (8)の〝たたむ月〟も、これから立つ月で〝来月〟の意としている。

(三) (1)(7)の〝たちぬる月〟は、すでにたっている月で、〝先月〟の意としている。

次に解釈について、意見の相違や問題点のあるのは、

(四) (10)の〝月たちて〟(11)〝月たちての程に〟の〝月たつ〟の〝たつ〟は(10)の例でいえば、〝三月が過ぎて〟と〝過ぎる〟意とするもの（山岸・大系）と、〝四月になって〟と〝新しい月になったら〟と解するもの（池田・全書）とがある。

(五) (3)の〝月もたちぬ〟についても、(四)の〝月立ちて〟と同じように、〝前の月が過ぎる〟というのと、〝新しい月が始まる〟というのと二つの考え方がある。

(六) なお(2)の紅葉賀巻の藤壺御産の事に関する条は〝この月は〟の次に言葉がはさまって〝たちぬ〟と続くのであるが、諸註とも〝過ぎてしまう〟としていて意見の相違は見られない。

右の〝月たつ〟の〝たつ〟は、〝月が始まる〟のか〝月が過ぎる〟のであるかの問題について考究を進めたいが、その前に、〝月たつ〟という表現について考えてみたい。

そもそも、われわれの祖先たちは、いかにして時間の推移を知覚し認識するようになったのであろうか。まず毎日、太陽が東から昇り高くなり西に沈む、そして暗い夜が来て、やがてまた朝となり太陽が昇る。これを一つの区切りとして知覚し、認識し、〝日〟という概念を得たであろう。〝日〟は天体としての太陽であり、暦日としての日であることは、現代のわれわれの意識にも、連綿として続いてきているのである。私たちは今でも、生活用語として

は、ごく自然に〝日が出た〟〝日が暮れた〟〝まだ日がある〟（太陽の照っている場合と日数の余裕がある場合の両方に使う）などと言うのである。

〝月〟についても全く同じである。二十九日乃至三十日を周期として満ち欠ける天体の変化の周期を一単位として、暦の月ができるのである。私たちは今でも、天体の月も、暦の月も、全く同じように〝月〟と呼ぶ。

そして春夏秋冬の季節のめぐりを周期として〝年〟という概念を獲得する。（トシは年に一度の稲の収穫に基づいた名称という。――三省堂・時代別国語大辞典・上代篇「とし」の項）

日・月・年という、われわれの祖先の考え出した時間単位の中でも、月は特に人間の生活や心情に深いかかわりを持つ。もちろん、〝日〟は熱と明るさによって人間に生命を与えている点で、はかり知れぬ重要さを持つのであるが、その日の沈んだ夜のやみを照らす月は、それに劣らず人間の暮らしと心に深くはいりこむ。それは、潮の満ち干と結びついていて船旅や漁業には重大な関係を持つ。特に、暦のなかった未開の時代、のちに暦が出来ても一般に普及しなかった時代には、月の満ち欠けによって、われわれの祖先たちは、月の改まるのを知り、そして、月の形によって日を知ったであろう。（古代人は月を実用的に見ていて、生活との関連の深かったこと、したがって月の改まる感慨は、後世より、はるかに強かったらしいことは、時代別国語大辞典・上代篇〝つき〟の項が指摘している）

そのことに関連するが、この小論で問題としている〝月立つ〟という言葉も、〝暦の月が改まる〟という抽象的な認識のほかに、自然現象として、天体の月の具体的な姿を表現している。

何日か月のない夜を経験した人々は、新月がまだ夕映えの色を残す西空に、眉の如き細身の姿をくっきりと浮き立せる情景は、たしかに〝立つ〟という感じを与える。

万葉集にも、月立ちてただ三日月の眉根掻き日長く恋ひし君にあへるかも（巻六・九九三・坂上郎女の初月の

歌)

などと詠まれている。〝月立つ〟という表現の発想は、新月の出現する姿から出ているのではないかと、考えられる。〝晦日(つごもり)〟が〝月隠(つきこも)り〟から出たように。私が〝月立つ〟を取り上げた直接のきっかけは、前にあげた源氏物語の用例の中の(9)の〝月も立ちぬ〟の解釈についてである。薫の年齢二七才の二月が始まる時点での表現である。

ここの解釈として、管見に入った註釈を引くと、次の如くである。

1 (吉沢・対校) 正月もすぎた。

2 (山岸・大系) 〝月も〟の「月」を「正月」と註す。

3 (玉上・評釈) 月も終った。

4 湖月抄(細) 正月も過ぐる也。

(池田・全書) には記述がない。

どうして、これを、〝月も改まった〟としないのであろうかという疑問が、なかなか消えないのである。

ここで辞書の類を探ってみよう。

〝たつ(立)〟という動詞の意味で、この場合に関係のある項目を見ることとする。

(1) 大日本国語辞典が[廿一]「月日過ぐ、経(フ)。経過す」の例として次の歌をあげている。

A 君を思ひあが恋ひまくは、あらたまの多都(タツ)月ごとによくる日もあらじ(万葉三六八三)

B もみぢ葉の錦と見ゆる秋なればたつを惜しとや鹿のなくらん(陽成院歌合)

Aの〝たつ月〟は、岩波大系本の「万葉集」の解釈でも〝来る月〟であって、〝経過す〟の意味にはとり難い。Bは〝秋のたつのが惜しい〟で、「経過」の意となるが、〝錦を断つ〟をかけてあるからやや特殊な場合といえよう。

月に関して言えば、この用例は「経過す」の意には当らないし、明らかに、この辞典が、次の[廿二]であげている〃来たる・到る〃の意である。

[廿二] 来たる。到る。

A　卯の花のさく月立てばめづらしく鳴く霍公鳥(ほとときす)……（万葉四〇八九大伴家持長歌）

これは〃卯の花の咲く月（四月）になると……〃の意で問題はない。他に万葉集の〃春たたば〃古今集の〃秋立ちける日〃の例をあげている。

(2) 大言海（十九）に〃来る・到る・其時になる〃の意をあげ、〃秋立つ〃〃春立つ〃の用例をあげている。「月日過ぐ。経過す。」の意はあげていない。

(3) 中田祝夫編・新選古語辞典⑧（季節や月が）やってくる。始まる。（蜻蛉日記の〃立たむ月〃の例）⑨（月日が）過ぎる。経過する。（用例は、今私が問題にしている(9)の〃月も立ちぬ〃をあげている）

(4) 三省堂・時代別国語大辞典上代篇④月が姿を現わす⑤時間が到来する。経過する。（用例）Aむ月立ち（万葉八一五）　B月立ちてただ三日月の…（万葉九九三―前出）　C…春立つらしも（万葉一八一二）　D…秋立たずとも（万葉一九六五）　Eオキつ波たつ毎年(トシノハ)に（続後紀嘉祥二年）

（注）右の⑤の用例A～Eは私の解するところでは、すべて「時間が到来する」意であって「経過する」の意のものは一つも見当らない。

(5) 中田・新選古語辞典「つき(月)」の項。「月立つ」①月が変わる。②月が出る。月が上る。（〃経過する〃の意は、あげてない）

(6) 大日本国語辞典たつ（立）の他動詞（下二段）[廿二]経過せしむ。過ごさす。（用例　五月の頃いひわたりける男に、この月をたててと、いひつかはすとて　万代二）

（注）右引用書万代和歌集は、大体平安期から鎌倉初期の歌人を主としていて、宝治二年（一二四八）撰定とされている。したがって源氏物語よりは、かなり後のものである。

(7) 雅言集覧　たつ　月日のタツ也　たゝん月　来月をいふ　たちぬる月　去月をいふ。

（用例）後拾遺、恋一、道綱、なき人は音づれもせで琴の緒をたちし月日ぞかへり来にける（注）あとは「たたん月」「たちぬる月」の用例をあげ、最後に、源氏の用例、本稿の最初に掲げた例(2)（紅葉賀巻）をあげている。

さて右の道綱の歌の「たちし月日」について考えてみるに、その詞書によれば、母の一周忌を終えて、つれづれの夕暮に、塵の積った琵琶をおしぬぐい、服喪も終ったので折々鳴らしたところ、相住みしている叔母から「琴のねきけば物ぞ悲しき」と言ってきたのへの返事に詠んだ歌で、喪ある時は琴の絃を断つのが礼であった。したがって、ここは「琴の緒を断つ」と「たちし月日」をかけたもので、やや特殊な場合であるが、「経過する」意の用例であると言わねばなるまい。

右に見てきたところでは辞書の類の用例は、「月がかわる、始まる」の意が多く、「経過する」の意は少なく、特殊な場合の例が多いことを見いだす。さてここで、源氏物語の用例にかえることとする。まず、さきに取り上げた(9)の浮舟巻の〝月も立ちぬ〟について、どのような場合の叙述であるかを見てみよう。この年の正月下旬（正月二十一日ごろ行なわれる内宴などを過ぐして後）匂宮は夜陰宇治へ赴き、薫を装って浮舟に逢う、翌日宇治に強引に逗留し浮舟と過し、その翌暁心を残して帰京する。匂宮浮舟を思い続け、宇治に文と使者を遣わす。宇治では右近が、事態をつくらうため、自分への使いであると周囲をごまかす。

よろづ右近ぞ、そらごとしならひける。月もたちぬ。かう思し焦らるれどおはしますことは、いとわりなし。かうのみものを思はば、さらにえながらふまじき身なめり、と、心ぼそさを添へて嘆き給ふ。……

京では匂宮が浮舟を恋うて焦慮の日を送り、宇治では右近が真相を隠すため苦労する場面である。月も立ちぬ、と〃意味を強め感情を含めて表現する助詞〃のもがはいっているのは、このような事情が切迫している中で、月が改まり、いたずらに日が過ぎゆくという感慨がこめられているものと解される。〃正月も過ぎた〃説は、月の終ったことに感慨をこめると取るのであろう。しかし、特にこの場合正月に重点を置かねばならない理由はない。しいていえば〃浮舟に逢うた忘れ得ぬ月〃という意識があるのだろうか。しかしそれほどの月意識を作中人物たちが持っていたと主張できる積極的な材料は見当らない。〃月立つ〃の発想からくる〃月が改まる〃という自然な意識で、この文を解釈するのが、きわめて素直で、妥当な考え方ではなかろうか。むしろ〃正月が過ぎた〃というよりも、〃月も改まった〃〃ああもう新しい月になった〃という方が、焦慮の中に日の過ぐる感慨がこもり、匂宮の煩悩はさらにはげしく募って行くのではなかろうか。

用例(3)の明石巻の「月も立ちぬ」についても、諸註釈は、右の(9)と同じような考え方を示しているものが多い。場面は源氏二九才、須磨にあり、六月頃より明石の御方懐妊の兆あり、七月廿余日、源氏召還の宣旨下る、女は思い沈む。「あるじの入道涙にくれて、月も立ちぬ。程さへあはれなる空の気色に、……」と続くところである。

1　(山岸・大系)「月」の傍註に〔七月〕、「あはれなる空の」の傍註に〔八月―秋の半の〕とある。

2　(玉上・評釈)その月も終った。

3　(松尾・全釈)月も代ってしまいます。(註)月も立ちぬ　八月になってしまった。花鳥余情・明星抄などは六月も過ぎて七月になったの意と解している。たしかに「程さへあはれなる……」は秋になったばかりの自然描写として見た方がよいようであるが、前に、「七月廿よ日の程に」とあるから、やはり八月になったと見るのが穏当であろう。

4　(阿部・秋山・今井　小学館・日本古典文学全集・源氏物語)(入道は涙にくれている中に、その月も果て、八月

となった。(註)「くれて」は、涙に昏れて、の意と七月が暮れて、の意をかける。「月立ちぬ」は、八月になる。

5　(湖月抄)(細)七月の事にや花鳥には六月云云程さへあはれなる空のけしきといへり。初秋のさま也。(哢)同〔私〕哢細等の儀は、七月のたちて八月になるといふか。七月廿余日かさねて宣旨とあり、さて八月に帰京と見えたり。

6　岷江入楚〔花〕六月もたちて、七月に成なり。(「湖月抄」と重複部分省略)

7　(花鳥余情—国文註釈全書による)…六月もたちて七月になる也

8　(細流抄—国文註釈全書による)湖月抄の(細)に同じ。

9　池田・吉沢には記述がない。

右の諸註釈を見るに、花鳥等の〃六月が過ぎて七月〃については松尾氏の判断が妥当である。最近の註では、大系・評釈が〃その月(七月)も終った〃と、「経過」説であり、松尾氏、小学館は〃八月になる。月が改まる〃説である。場面としては、明石方の物思い、悲嘆の中に、日が過ぎて月がかわるという境遇である。月がかわるということは、源氏の帰還が近づくことを意味する。ここは、月改まる説の方が穏当である。小学館の〃涙にくれて〃を〃七月が暮れて〃にかけて、「月立ちぬ」を〃八月になる〃としているのは明快である。ここで注意をひくのは、花鳥の一条兼良(一四〇二——一四八一)の時代には、〃六月もたちて七月になる〃と、「たつ」を〃経過〃の意にはっきりと、われわれが現在用いるように用いていることである。

次に用例(10)蜻蛉の「月立ちて」について。

1　(吉沢・対校)三月が過ぎて四月になって

2　(池田・全書)四月になって

3　（山岸・大系）三月が過ぎて、もしも（浮舟ガ）存命しているならば、浮舟がいかにも今日（四月十日）
4　（玉上・評釈）月がかわって四月になって

1と3の〃三月が過ぎて〃が「経過」説ととれるが、2・4は、月改まる説で、はっきりしている。

(11)の「月立ちの程に」について。

1　（吉沢・対校）四月に入っての頃
2　（池田・全書）月が変りました時分に
3　（山岸・大系）月が過ぎての来月頃に
4　（玉上・評釈）月がかわってのころに
5　（湖月抄）（抄）来月といふか隙次第御案内申さんと也。

右を見ると3の〃月が過ぎての〃が気になるが、他はすべて、月改まる説である。

(1)（紫の上の祖母の逝去の項）と(7)の「立ちぬる月」は、最初にも記したように、「先月」の意となる。この場合、この〃立つ〃は、〃月が改まる〃の意ととれないかどうか、なお考究してみたいが、このたびは見送り、一応、これは「経過する」意としておく。(2)の藤壷御産の事の項は、〃この月（正月）〃が何事もなくて〃立ちぬ〃とありこれは「経過」と考えざるを得ない。それにしても十一例中八例は、月改まる説で解釈できることになる。

ここで他の作品の用例を見てみることとする。数字は特に記さないものは「岩波大系本」のページ数を示す。解釈

は原則として、その本によった。

1　落窪物語

A　かくて月立ちて（十二月ニナッテ）……一二八

B　月立ちぬれば（月がカワッテ六月ニナッタノデ）……一六九

2　蜻蛉日記

A　やうやう月立ちて日も行けば（ダンダン死ヌトイワレタ月、即チ八月ニナッテ日モ過ギテユクノデ）…天暦二年八月一九日柿本奨・全注釈下一〇三

B　うべもなく九月も立ちぬ（予想が当ッテ九月ニナッタ）……同右

C　「『この月日あしかりけり。月立ちて（来月ニナッテカラ）』となん暦御らんじてだいまものたまはする」……天延三年三～四月同右下一五七

D　かくて月果てぬれば、はるかになり果てぬるに、思ひ憂じぬるにやあらむ、音なうて月たちぬ。（コウシテ四月ガスンデシマッタノデ話ハ遠イ先ノコトトキマッタタメ、右馬頭ハ憂ウツニナッタノダロウカ、音沙汰ナクテ翌月ニナッタ）…天延二年四～五月　同右一八五

3　古事記　中巻　景行天皇・小碓命の東伐　二一七～二一九

爾に美夜受比売、其れ意須比の襴に、月経着きたりき。故、其の月経を見て御歌曰みしたまひしく、

ひさかたの……汝が着せる襲の裾に月立ちにけり（月立ツハ新月ノ現ワレル意。ココハ月経ノ血ノツイテイルノヲ新月ガ現ワレタノニタトエタ。）

とうたひたまひき。爾に美夜受比売、御歌に答へて曰ひしく、

高光る……我が大君　あらたまの　（注）年が来経ふれば　あらたまの　月は来経往く　諾な諾な諾な　君待ち難

に　我が着せる襲の裾に　月立たなむよ（新月ガ出ルデアリマショウヨー月経ノ血モツキマショウヨ）

（注）年ガ経過スルニツレテ月モ経過スル意

右の〃月立つ〃は、註にもあるように、表に新月が出るといって、裏に月経の血もつきましょうよ、と言っている。

4　万葉集は、前述の辞書類の引用したものをはじめ、きわめて多いので、ここには省略する。

5　栄花物語　巻廿八　わかみづ　大系本　下…二七七～八

かくいふ程に霜月になりぬれば…（中宮威子ノ御産ノ準備ヲスル）まいてこの月になりぬれば待たせ給ふ事そひて…はかなくて月も立ちぬ。十二月になりぬれば、立ちぬる月にだにおはしますべかりしに（スデニ去月十一月ニオ産ガアルベキハズデアッタノニ）……

右の月も立ちぬも前掲の源氏物語の用例(3)(9)と同じようなケースであるが、〃月がかわった〃と解することができる。〃立ちぬる月〃は先月である。栄花物語は、偶然目についたものをあげたにとどまる。

〃月立つ〃の用例の見つからなかった作品

1竹取物語　2土佐日記　3大和物語　4落窪物語　5枕草子　6和泉式部日記　7更級日記　8浜松中納言物語　9堤中納言物語

さて、これまで見てきたところでは、万葉や源氏等の用例では〃月たつ〃というのは、新しい月が始まる意が多く、経過する意の用法は、きわめて稀であることを見出だす。それでは、月、日、年が経過する場合は、どういう表現をしているかをみると、「経（ふ）」「過ぐ」という語をとることが多い。特に〃経（ふ）〃が多く用いられている。なほ、経過する場合には、単独に〃月〃があらわれることは稀である。そのときは月日・年月という形をとる。私の

調べたところでは、「月」が源氏物語に三十五例出てくる中で「経(ふ)」「過ぐ」がつくのは一例も見当らない。もっとも一月二月という月名の場合は、まだ一々当っていないが、今までのところは、「過ぐ」は出てくるが、「経」は珍しいようである。

〃かくても月日は経にけり〃　〃月日経て〃　〃はかなく日ごろ過ぎて……〃（いずれも桐壷巻）など多く出てくる。

上代では、前記美夜受比売の項の、〃あらたまの年が来経ればあらたまの月は来経往く〃は年月の経過を現わしている好例である。万葉集になると、月が「経(ふ)」をとる形の例はきわめて多い。〃月ぞ経にける〃（九九三・一〇三二・二〇九二・三六六三）のほか、〃月の経ぬらむ〃　〃月の経去けば〃　〃月の経去れば〃など枚挙にいとまがないほどである。

また「年」も〃経にける〃　〃経ぬれば〃　〃経ゆけば〃など「経」をとる例はきわめて多い。そして「月日」「年月」と重ねる熟語があらわれる。（古事記には、「月日」「年月」は見当らない）なお万葉集には「月ごろ（数か月来）」はみられるが（四例ほど）、年ごろ（長年の間・多年来）「日ごろ」（多くの日数・数日来）は見当らない。なお、これらの調べは、不十分であるので、さらに後日を期したいが、おおよその趨勢は察することができよう。

万葉集には、〃月立つ〃〃月経(ふ)〃〃月ごろ〃など〃月〃という時間単位をよく使っていることは注目に値する。現在私たちは、〃日ごろ（平生―「多くの日数の継続して今に至る」の意から出る）〃〃年来（の宿願）〃などと、〃時の連続をあらわす単位〃――それは時間に対するわれわれの感覚の仕方であり、認識の単位である――に〃日〃年〃とを用いるが、〃月ごろ〃という語はほとんど用いない。源氏物語には、〃月ごろ〃は〃年ごろ〃〃日ごろ〃とともによく出てくる。吉沢対校源氏の索引によってみると、月ごろは五五例ほど、日ごろは八〇ぐらい、年ごろは最も多く二八一ぐらいある。このことは古代人の生活に、月が（天体の月も、暦の月も）深くはいりこんでいたことを示していると言えよう。そして現在では、それが希薄になってきている。現在のわれわれの生活の時間単位は、都会的生活

では〝週〟になりつつあると言えよう。つい昭和の初めまで、私たちの経済生活は月を単位としていて、みそか（三十日）に、その決済をしていた。もちろん、さらに大きい決済は年末（あるいは盆と暮れ）になされていたが――。しかしまだわれわれは、週給でなく、〝月給〟をもらい、電気・ガス・水道代、家賃等は月を単位として支払っている。このような、われわれの暮しに密接な関係のある〝月〟というものを、われわれの祖先が受容した一つの特徴的なパターンが、夕映えの西空に浮き立つ新月による〝月〟の更新であった。そうしたわたしたちの祖先たちの〝月〟の認識の仕方を万葉集から源氏物語まで辿ることができる。

付記。用例調べは、おおかた各作品の公刊されている索引によった。一々ことわることは省略させて頂いた。なお古事記と万葉集は、古事記大成・万葉集大成によった。